



Sumiyo IDA



Eric CASSINI



AlainDelorme

パリを表現するフォトグラファー

モードの発信地パリ。スポットライトをあびるモデルが最高に輝く瞬間を決して逃さないフォトグラファー。
プロへの道のり、芸術的感性の磨き方、ヘアメイクへの期待、一流フォトグラファーから届いた珠玉のメッセージ。



① Magazine Monsieur 2010 ②③④ Magazine Kibind 2010
⑤ LookBook Baptiste Viry 2009 ⑥⑦ Magazine Kibind
2009 ⑧ Cover Vinyl, Label Tricatel 2010



Profile

アラン・デュローム、1979年パリ生まれ。パリの写真学校(GOBELINS, l'école de l'image)卒業後、パリ第8大学写真学科でマルチメディアの原理を学び修士号を取得。学業で培った技術と知識が評価されアート・フォトグラファーとして活躍。ファッションや広告の作品も芸術性が高い。
www.alaindelorme.fr (Commercial Work) www.alaindelorme.com (Artistic Work)

Alain Delorme

ファッションも広告も芸術的、 アート・フォトグラファー

芸術の都パリ。アーティストが溢れているパリでは、アート・フォトグラファーとして成功するのは非常に難しい。アランの作品は、パリのギャラリーに展示されている。アート・フォトグラファーとして成功した理由はなんだろう。その感性、技術はどのように磨かれたのだろうか。

「ゴブランの写真学校は、技術を極めるには最適なところでした。ここで3年間、写真とマルチメディアのテクニクを習得し、大学に進んでテオリを学びました。学業は不要という考え方もありますが、私にとっては非常に有意義な5年半でした。

卒業後、デジタル写真の作品を展覧会に出品すると、これがパリでアルシンボルド賞を受けたのです。まもなく、パリのギャラリーから声がかかり作品が展示されるようになりました。拠点はパリですが、ニューヨークやロンドンのほか香港、上海、東京のギャラリーからも招待を受けています。

ギャラリーは勿論、雑誌や広告などのクライアントが彼のアーティストチックな才能を求めてくる。左ページのメイン作品②は雑誌用に撮影・加工したもののオリジナルな点はどこだろう。

「モデルの撮影とは別に、2つのボンボン(キャンデー)を撮影し、張り付けました。

このような発想が得意です。(右下)男性向けの雑誌では、靴を重ねあわせて作った作品がクライアントに喜ばれました。このほか、2人の少女を撮影し、人形の顔に差し替えた作品も自分の代表作になっています。」

本誌12号の一面を飾った作品は、メイク学校エコール・フルリモンのプロフェッサーと創り上げたファッション広告用の作品である。完成するまでのプロセスで、メイクアップ・アーティストとどんなやりとりがあり、何を期待していたのか。

「大学在学中から、現在も続けているのですが、エコール・フルリモンの生徒たちのブック用の写真を撮影しています。オード(メイクアップのプロフェッサー)の実力を知っていたので、彼女を指名しました。

誰もがやるように撮影前にデッサンが提案されます。これが、全体の方向性に沿うものであることが大事。方向性が間違っていないければ、フォトグラファーとして自分は柔軟に受け入れるタイプです。嫌なことははっきりしていま



すが、基本的に心が開いているので、実現してみたいイメージを発信してもらいたい。この点がオードから明確に伝わってきます。各々が才能をもちより、創り上げる世界において、提案する力は非常に大切です。」

※アラン・デュロームは、コマージュとアート作品を分けて、2つの異なる世界をサイトで表現している。(アドレスはプロフィール参照)



① Make up/Hair: Lorianne Léger・Stylisme: Eva Izambard・Modele: Emma・Cover for Becquet (3 Suisses) ② Make up/Hair: Lorianne Léger・Modele: Alina Yakovenko・DIVINE Bijoux ③④ Make up/Hair: Lorianne Léger・Modele: Daniela et Aude・P&G magazine ⑤ Stylisme: Eva Izambard・Modele: Aurélie・Edito Lady Dior et Azzedine Alaïa



パッションが切り開いた、ファッション・フォトグラファーの扉

ビジネスマンから華麗な転身をとげたフォトグラファー。3人の子どもをかかえるサラリーマンがファッション・カメラマンとして独立。フランスのファッション専門テレビ番組にもしばしば登場する。彼は何を考え、どんなステップを経て、成功を手に入れたのだろうか。

「カメラは独学です。技術は現場で習得するものだと考えています。ビジネスマンとして勤続10年後1年間の休暇をもらって、まず、トップモデルと一流のスタイリストやヘアメイクを雇いました。衣装を購入し、スタジオを借りて自分のブック用の写真を撮影したのです。自腹を切つて、とにかく一流の人材を集めました。完成したブックを持参して、デザイナーのメゾンや広告制作会社、ミュージシャンや俳優を訪ねてまわったのです。」

当時、同僚は冷笑していました。しかし、最高のブックを作ったことから注文が相次ぎ、独立するのに十分な顧客が見つかりました。私の座右の銘は、『Passion, not Fashion』つまり、大事なのはファッションではなくパッション。情熱が成功の鍵です。」

情熱に溢れ、才能に恵まれたフォトグラファーは数知れない。そのなかで、あつという間に頭角を現した。アメリカの有名音楽会社をはじめ、最近では中国からもオーダーが舞い込んでくる。左ページの大作品⑤のような、

ジュエリー・デザイナーからも依頼がある。クライアントが後を絶たない理由はなんだろう。

「モードが好きなので、ファッション・カメラマンを目指したのが功を奏しました。パリでは、何でもやるというジェネラリストでは大成できません。自分のスタイル、強いイメージをアピールしています。」

また、ビジネスマンの経験が財産になっていきます。クライアントに厳格に接すること。アーティストだから許されるのだという甘えはいけません。時間や約束をきちんと守り、完成したものを納品することが大事です。」



撮影にはクライアントが立ち会い、ヘアメイク・モデル、スタイリストなど多くの人々がかかる。その現場で陣頭指揮をとるのはカメラマン。チームを構成する時、どのようにヘアメイク・アーティストを選び、どんなことを期待しているのだろうか。

「才能と創作力です。才能は、ブックを見るとレベルが一目でわかります。だから、プロの手を借りてブックを作る必要がありますね。クリエイティブな力は、自分のイメージを提案できることです。最後に最も大事なことで、それは、『笑顔』です。クライアントの前に、自分の世界だけに没頭している姿勢は望ましいことではないですね。笑顔は、撮影現場に欠かせません。」

※ エリック・カッシーニは、ヘアメイクを対象にしたブックの制作「日コース」をプロデュースしている。プロのモデルに3種類のヘアまたはメイクをし、パリ市内5ヶ所まで撮影。料金は、必要なスタッフと衣装込みで、約900〜1200ユーロ。英語可。



EriC CASSINI

Profile

エリック・カッシーニ、1964年パリ生まれ。ビジネスマンとして世界各地を駆け回って10年後、1年間のサバティカルイヤー（休暇年度）中にフォトグラファーに転身。パリとロスを拠点に、広告や雑誌などファッション・フォトグラファーとして活躍。パリではディオール、ブルガリ、ランバンなどの広告、ロスではEMIやWaner MusicなどのCDジャケット撮影を担当。www.ericcassini.com



① GRÜND DUO GOURMAND "SUSHI & WOK" 2010
② SHOGO MATSUDA Collection 2010 ③ Serie "IBUKI"
2007 ④ es Collection 2006 ⑤ es Collection 2006
⑥ SHOGO MATSUDA Collection 2010



Profile

井田純代、1974年生まれ、東京出身。大学卒業半年後に本物のアートを見るために渡仏。語学学校から、パリの写真専門学校EFETに進み、更に、ヴェルサイユの美術学校写真学科へ。ディプロム取得後、プロとして独立。パリを拠点に、雑誌や書籍、CDジャケットの撮影ほか、JMAパリコレプロジェクトの撮影を担当。www.sumiyoidea.com

Sumiyo IDA

写真はアート表現、パリコレの瞬間をとらえるフォトグラファース

パリコレのランウェイ撮影。狭いプレス席にすし詰めに並ぶカメラマンのなかにひとときわ小柄な日本人女性カメラマンが大きなレンズを構えている。フルショットからヘアメイクのアップへ。貴重な瞬間を逃さない技術とセンスはフランス人カメラマンも目を見張る。ここに至るまで、どんな道を歩んできたのだろうか。

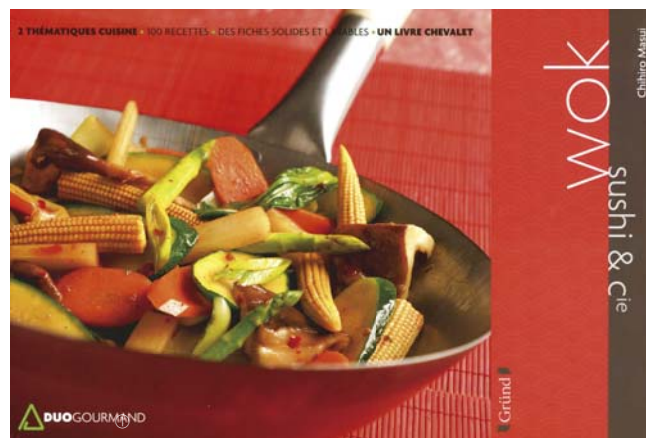
「写真は、フランスに来てから初めて学びました。技術も用語も全てフランス語で覚えてから、日本語で確認しました。渡仏の動機は、日本の大学で専攻したシュールレアリスムを掘り下げるためでした。それが、語学学校に通っていたリヨンで、偶然、カルチャーセンターの写真講座を見つけ、白黒プリントの技術を学ぶ機会を得ました。写真は、アート表現のひとつであるという確信を持ったので、パリの写真専門学校に進学し、2年間スタジオ撮影技術を学びました。3年目からは美術学校に編入し、テーマ性のある作品作りに励みました。」

学業を終えた直後、2003年に開催された第3回アルル市ヨーロッパ・ヌード写真祭で大賞に輝くという快挙を達成。早くも才能が認められた。プロとして自覚が芽生え、仕事も軌道に乗った。日本の雑誌は勿論、フランスの出版社から料理本の撮影などもまかされる。プロとして、フランス・パリで活躍するには、どうしたらいいだろう。

「学校に通った5年間は有意義でした。しかし、卒業するだけではプロになれません。フランスには、スタージューという学生の研修システムがあり、これが大切です。私も、学生時代からスタジオでスタージューをさせてもらい、一流のカメラマンのライティングを間近に見て、実践していました。スタージューの1カ月は、学業の1年分にも相当します。また、ここで培った人脈は財産です。これから挑戦しようという人は、このスタージューから始めることも可能です。フランス語か英語ができればチャンスはあります。」

プロのフォトグラファースとして撮影現場に入る時、ヘアメイク・アーティストにどのような期待をしているのだろう。

「テーマを理解して、それを形にできること。時には、クリエイティブなものを見せたくて暴走する人もいます。自分の作品である前に、みんなで創り上げる作品であることを理解しなければなりません。デザイナーのテーマがあり、写真のテーマがある。例えば、左ページの作品(②)は、日本人のクリエイターの作品集なのですが、フィルムで撮影しクロスプリントし、独特なコントラストを狙っています。ヘアメイク・アーティストには、モデルにシャープネスを与えるために、



メタリック調のアイメイクをリクエストしました。彼女は、テーマをよく理解してくれました。完成した作品は、クリエイターをはじめ、みんなが納得いくものになりとても満足しています。」

※井田純代は、瞬間の表情をとらえるという点でポートレートと料理に共通点を見出す。料理人の気持ちや表現し、食する者の感性を刺激する作品が評価され、フランスの人気料理本シリーズの「中華と寿司」を担当。全ページ撮り下ろし。(C)